

# 徳島県犬伏蔵佐谷出土瓦経片の復原と考察(続)

——『妙法蓮華經』「卷第五、六について」——

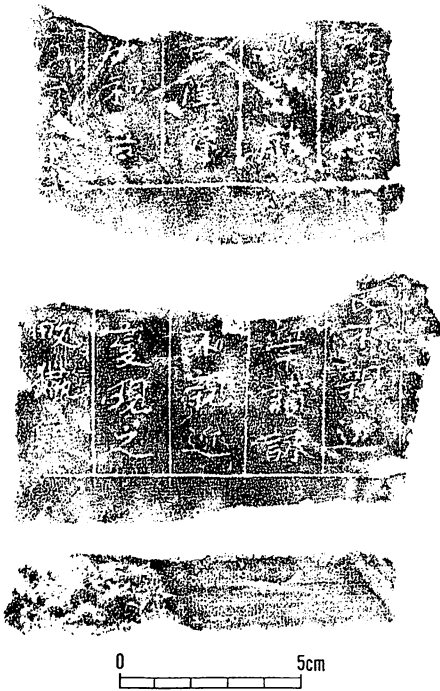
網干善教

徳島県板野郡板野町犬伏に所在する徳島県指定史跡蔵佐谷(旧釈迦堂)瓦経塚出土の瓦経片のうち、徳島県有形文化財に指定されている阿南市長生町善昌寺西室美術館に所蔵の資料について、その復原と考察を行い、順次成果を発表してきた<sup>①</sup>。本稿はその一部に該当するもので、『妙法蓮華經』(後秦龜茲国三蔵法師鳩摩羅什訳)巻第五及び六について記述するものである。

①の破片は浪花勇次郎氏編『阿州大伏旧釈迦堂跡出土瓦経拓』(以下「浪花拓本集」と略す)二八頁に収められた破片である。表面をみると、

.....是經」  
 .....近處能」  
 .....菩提摩」  
 .....□和善」  
 .....とあり、裏面に  
 .....不親近」  
 .....筆讚詠」

.....不親近」  
 .....變現之」  
 .....敗獵皴」  
 とある。これは『妙法蓮華經』巻第五、「安樂行品」第十四のはじめのところにあたる。書写された部分を『大正新脩大藏經』によって同定復原すると次の如くなる。(ゴチは瓦経の文字。以下同じ)



① 卷第五 安樂行品 (上=表、下=裏)

〔表〕 誓願於後惡世護持讀說是法華經世尊菩

薩摩訶薩於後惡世云何能說是經佛告文

殊師利若菩薩摩訶薩於後惡世欲說是經

當安住四法一者安住菩薩行處及親近處能

為衆生演說是經文殊師利云何名菩薩摩

訶薩行處若菩薩摩訶薩住忍辱地柔和善

順而不卒暴心亦不驚又復於法無所行而

觀諸法如實相亦不行不分別是名菩薩摩

〔裏〕

訶薩行處云何名菩薩摩訶薩親近處菩薩

摩訶薩不親近國王王子大臣官長不親近

諸外道梵志尼捷子等及造世俗文筆讚詠

外書及路伽耶陀逆路伽耶陀者亦不親近

諸有兇戲相叔相撲及那羅寺種種變現之

戲又不親近旃陀羅及蕃猪羊鷄狗略獵漁

捕諸惡律儀如是人等或時來者則為說法

無所怖望又不親近求聲聞比丘比丘尾優

となる。したがって『浪花拓本集』の下側の位置に掲載されているのは

表面であり、上側の拓本は裏面で上下逆になっている。

復原の過程で判明したことを挙げると、この瓦経片は表面からみた場

合、前二行分と、後一行分が欠損していることが判明する。

次に、この瓦経片は「安樂行品第十四」の冒頭であるが、表面最初の

行の「誓願於後惡世護持……」の「誓願」までの欠損している二行分は

「爾時文殊師利法王子……」の冒頭から全部で三三文字である。犬伏瓦

経の一行の文字は十七字であるから一字不足することになる。それはそ

れとして、この二行は前の相当する瓦経の裏面に書写されたものと考え

てよい。そこで、以前に『関西大学博物館紀要』創刊号に記述した『阿

波国出土瓦経片の積聚―散在する資料の集録と復原―』で挙げた、犬伏

天理教蔵の破片②は巻第四「勸持品」の最後の部分であって、裏面最終

に二行の空白が残る。これと、今ここに挙げた瓦経片は接続するもので

あるから、二行の不足分は前の瓦経の最後の二行に書写されたと考えれ

ば完全に続くことになる。恐らくそれで間違いないと思うが、その場

合經典首題を書く行がとれない。ただ、瓦経の場合は「安樂行品」とい

った首題は書かれなく、改行だけで連続していたものと考えられようか。

次に、瓦経表面四行目を復原するとこの行だけ十八字で一字多い。そ

の理由は、上から六字目に画数の少ない「一」という文字が入ることか

ら、この行は十八字となったものと考えるのが適当と思う。

また、裏面六行目の十七字目の文字が、この瓦経では「鯪」となっ

ている。ところが『大正新脩大藏經』の脚注⑩によれば『東京国立博物館

本』では「魚」であるとす。『法華經一字索引』では「漁」となっ

ている。

あとは問題ないが、これと同じ「安樂行品」の冒頭の部分を書写した

瓦経片は、江口治郎氏より関西大学博物館に寄贈された一点と鳥取県倉

吉市博物館に所蔵される伯耆大日寺出土の瓦経片にみられる。

なお、原形の大きさを推定すると、瓦経表面の「不親近」の三文字が

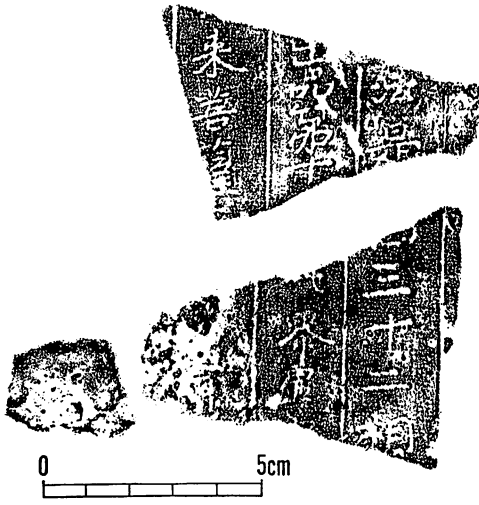
三・六<sup>三</sup>、これを十七字とし、上下共に一<sup>三</sup>の縁を加えると、縦は約二

一、一行の幅が二・一、これが八行と左右の縁各〇・五を加える  
と横幅は一七・八となる。厚さは二・二である。

② 次に、表面に

- ..... 法是.....
- ..... 出品第十.....
- ..... 来菩薩.....
- ..... 三十二相.....
- ..... 界虚.....
- ..... あり、裏面に

とある。これは『妙法蓮華經』卷第五、「安樂行品」第十四の最後の行



② 卷第五 安樂行品 (上=表、下=裏)

から、「從地踊出品」第十五の冒頭の部分であることが分かる。『大正新脩大藏經』によつて復原すると次の如くである。

〔表〕 若後惡世中說是第一法是人得大利如上諸功德

妙法蓮華經從地踊云品第十五

爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩過八恒河沙數於大衆中起立合掌作禮面白佛言世尊若聽我等於佛滅後在此娑婆世界勸加精進護持讀誦書寫供養是經典者當於此土面廣說之爾時佛告諸菩薩摩訶薩止善男子不須汝等護持此經所以者何我娑

〔裏〕

婆世界自有六萬恒河沙等菩薩摩訶薩一菩薩各有六萬恒河沙眷屬是諸人等能於我滅後護持讀誦廣說此經佛說是時娑婆世界三千大千國土地皆震裂而於其中有無量千萬億菩薩摩訶薩同時誦出是諸菩薩身皆金色三十二相無量光明光盡在此娑婆世界之下此界虛空中住是諸菩薩聞釋迦牟尼佛所說音聲從下發來一一菩薩

となる。この瓦経の書写をみると、表面最初の行は「安樂行品」の最後の偈文の行である。偈文は五字一句、四句一行の形式であるから、ここに挙げた一行が書写される。次の行は「.....出品第十.....」だから、いうまでもなく「從地踊出品第十五」に相当する。ただ、瓦経に残存する

文字の位置を左右の行の文字の位置と対比すると、經典首題である『妙法蓮華經』の文字があつたと推定できる。それでも一―二字位置の違いはあるが、これは書写する場合の文字の配置で少しばかりの相違は生じるであらう。但し①の瓦経は、その接続からみて經典首題が書写されていなかったと判断したと相違する点はよくわからない。

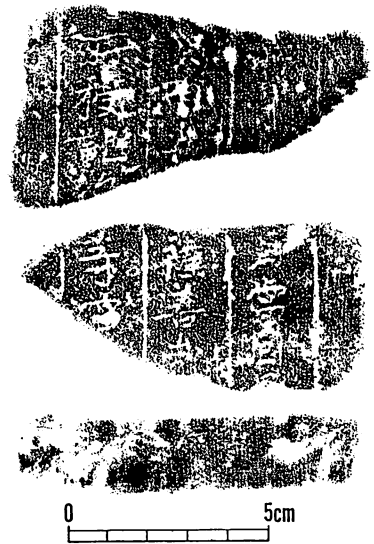
なお、これと同じ箇所を書写した瓦経片として西宮市黒川古文化研究所蔵品に一点がある。<sup>④</sup>

瓦経の原形の復原は裏面の「三十二相」の四字が四・三ツであるから一行十七字詰とし、上下に縁各二ツを加えると約二十・三ツ、横幅は一行が二ツで八行、両端縁左右各一ツを加えると約十八ツとなる。厚さは二・一ツである。

『浪花拓本集』三〇頁の上段に挙げられたものがこの瓦経片で、右上が表面、左下が裏面となる。

③ 瓦経片の表面に

- .....世.....
- .....所來.....
- .....與有菩.....
- .....所授記.....
- とあり、対する裏面に
- .....自當因.....
- .....菩薩哉.....
- .....等當.....



③ 卷第五 從地踊出品 (上=表、下=裏)

と読める経文がある。これは『妙法蓮華經』卷第五「從地踊出品」第十の五の経文であることがわかる。これを『大正新脩大藏經』で復原すると次の如くである。

〔表〕 爾時釋迦牟尼分身諸佛從無量千萬億他

方國土來者在於八方諸寶樹下師子座上

結加趺坐其佛侍者各各見是菩薩大衆於

三千大千世界四方從地踊出住於虛空各

白基佛言世尊此諸無量無邊阿僧祇菩薩

大衆從何所來爾時諸佛各告侍者諸善男

子且待須臾有菩薩摩訶薩名曰彌勒釋迦

牟尼佛之所授記次後作佛以問斯事佛答

〔裏〕

之汝等自當因是得聞爾時釋迦牟尼佛告

彌勒菩薩善哉善哉阿逸多乃能問佛如是

大事汝等當共一心被精進鎧發堅固意如

來今愆頭發宣示諸佛智慧諸佛自在神通

之力諸佛師子奮迅之力諸佛威猛大勢之

力爾時世尊欲重宣此義而說偈言

當精進一心我欲說此事勿得有疑悔佛知叵思議

汝今出信力往於忍善中昔所未聞法今皆當得聞

破片にみる経文は偈文の終ったあと「爾時釋迦牟尼分身諸佛」からはじまり、裏面の最後の二行は偈文となる。途中『大正新脩大藏經』では改行のところ一箇所あるが、瓦経では改行しないのが通例である。残存するのは小破片であり、文字数も少ないので特に問題はない。

原形の大きさは、表面最後の行の「所授記」の三字が三・三字であるので、一行十七字詰とし、上下端各一字を加えると計二〇・七字となる。幅は一行二字であるから、それに左右端縁各一字を加えると計約十八字となる。厚さは二字である。

なお、この瓦経片は『浪花拓本集』四七頁の下段の二点で、左下が表面、右上が裏面で位置が逆になっている。

④ これも小破片の瓦経であるが、表面に

……五指百歲人……

……是我父生育……

……來□□未……

……千万億劫……

と判読でき、裏面は

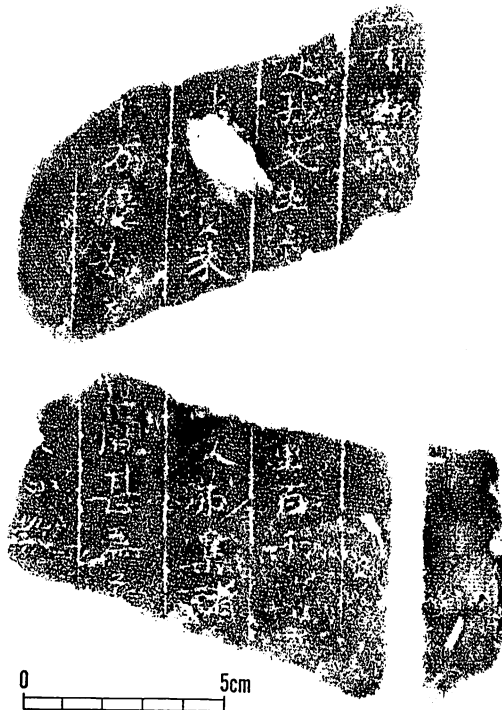
……量百千萬……

……次第習諸……

……世間甚為……

……□□教……

とある。これは先と同様「從地踊出品」第十五であり、③の瓦経片の三枚あとの破片であることがわかる。経文を復原すれば次の如くなる。但し上下共に欠損しているため、位置が不明であるから、九行前の偈文が終つて改行したところから復原し、位置を決めることになる。



④ 卷第五 從地踊出品 (上=表、下=裏)

〔表〕 大菩薩衆假便有人於千萬億劫數不能盡  
不得其邊斯等久遠已來於無量無邊諸佛  
所殖諸善根成就菩薩道常修梵行世尊如

此之事世處難信譬如有人色美髮黑年二十五指百歲人言是我子其百歲人亦指年少言是我父生育我等是事難信佛亦如是得道已來其實未久而此大衆諸菩薩等已於無量千萬億劫為佛道故勸行精進善入

出往無量百千萬億三昧得大神通久修梵

行善能次第習諸善法巧於問答人中之寶

一切世間甚為希有今日世尊方云得佛道

時初令發心教化示導令向阿耨多羅三藐

三菩提世尊得佛未久乃能作此大功德事

我等雖復信佛隨宜所說佛所出言未曾虛

妄佛所知者皆悉通達然諸新發意菩薩於

佛滅後若聞是語或不信受而起破法罪業

となる。小破片であり書写上問題はない。

大きさは裏面一行目の「量百千萬億」の五字が五・九で、上下端各一を加えると約二十二で、幅は一行が二で八行、左右両端各一・三があるから、計約十八・六となる。厚さは二である。なお、『浪花拓本集』三四頁はこの破片であるが、下側の拓本が表面であり、上側の拓本は裏であって、位置が逆になっている。

⑤ 表面がかなり磨滅している破片である。表面は五行分があるが、辛じて次の文字を読むことができる。

「□□□□……………」  
「下□阿……………」  
「中□若……………」  
「中□□……………」  
「説□□……………」  
「若持法華……………」  
対する裏面は

「□□……………」  
「□□……………」  
「天人阿修羅……………」  
「諸天等宮殿……………」  
「諸大海水……………」  
「若□□……………」

が判読できる。これは『妙法蓮華經』卷第六、「法師功德品」第十九である。以下、次の如く復原する。

大千世界衆生時死時上下好醜生善處  
惡處悉於中現及鉄圍山大鉄圍山弥樓山  
摩訶弥樓山等諸山及其中衆生悉於中現  
下至阿鼻地獄上至有頂所有及衆生悉於  
中現若聲聞辟支佛菩薩諸佛說法皆於身  
中現其色像爾時世尊欲重宣此義而

説偈言

若持法花者 其身甚諸淨 如彼淨琉璃 衆生皆慧見



⑤ 卷第六 法師功德品 (上=表、下=裏)

又如淨明鏡 悉見諸色像 菩薩於淨身 皆見世所有  
 唯独自明了 餘人所不見 三千世界中 一切諸群萌  
 天人阿修羅 地獄鬼畜生 如是諸色像 皆於身中現  
 諸天等高殿 乃至於有頂 鉄圍及弥樓 摩訶弥樓山  
 諸大海水等 皆於身中現 諸佛及聲聞 佛子菩薩等  
 若独若在衆 說法悉皆現 雖未得無漏 法性之妙身  
 以清淨常体 一切於中現

復次常精進若善男子善女人如來滅後受  
 となる。但し表面の文字は一行十七字詰という原則に合致しない箇所があるから、一応の復原ということになる。

書写の文字については特に問題はないが、強いて挙げれば、表面最終行が、瓦経では「若持法華經」とあるが、『大正新脩大藏經』では「若持法花者」とある点だろう。

さて、原形の復原は、瓦経片の表面最終行の「若持法華經」の五字が五<sup>マ</sup>である。但しこの部分は五字一句、四句一行の偈文であり、各句間三箇所に〇・五<sup>マ</sup>程の空きがある。そして上下端縁各一・五<sup>マ</sup>あるから計算上は約一九・五<sup>マ</sup>となる。幅は一行幅平均二<sup>マ</sup>であり、両端縁一・五<sup>マ</sup>程あるから、計一九<sup>マ</sup>程となる。厚さは二・三<sup>マ</sup>とやや厚手である。

⑥ 表面に一行だけ経文があるのみの破片である。

……以千萬種 善巧之語言 分……

とあり、裏面は罫線はあるが四行共に空白である。そこで表面を復原すると次の如くなる。

能以千萬種 善巧之語言 分別而說法 持法花經故

となる。そうするとこれは「法師功德品」第十九の最後の一行分で、偈文であるから五字一句、四句一行が書写されている。そうすると、先述の⑤の次に続く瓦経があつて、最後の一行のみが書写できなくなり、新しく一枚を当てたと考えられる。通例では、そのあとに次の「常不輕菩薩品」第二十が書写されるのであるが、ここではそれが行われていない。その理由は不明である。

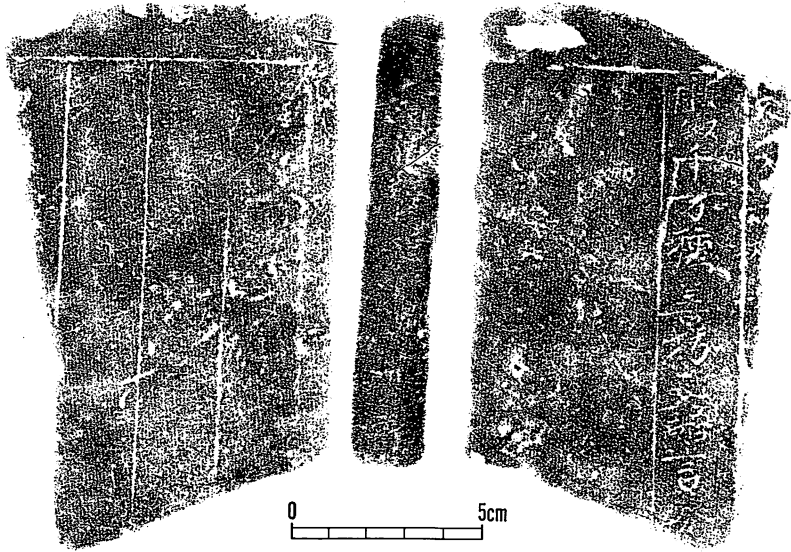
大きさは五字一句の二句分が一〇・五<sup>マ</sup>であるから、その二倍と上下端縁計約三<sup>マ</sup>を加えると二四<sup>マ</sup>程度となる。厚さは二・一<sup>マ</sup>である。『浪花拓本集』三七頁に掲載されている破片である。

とあり、裏面に

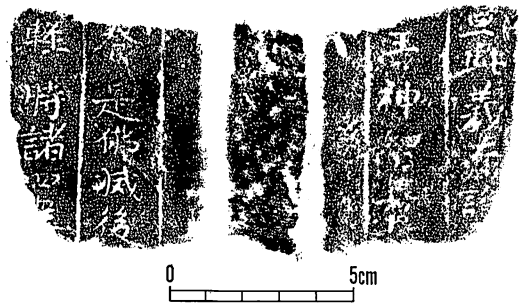
王神智無量

宣此義而説

⑦ 表面に



⑥ 卷第六 法師功德品 (右=表、左=裏)



⑦ 卷第六 常不輕菩薩品 (右=表、左=裏)

..... 養 是佛滅後.....  
..... 輕 時諸四.....

と判読できる。これは「常不輕菩薩品」第二十の終りに近い箇所である。まず、表面は一行の途中であり残存する文字だけでは位置は決らない。そこで「常不輕菩薩品」の最初から一行十七字詰で割付けてみることにする。その結果、この瓦経は次の如く復原することができる。

〔表〕 今此會中跋陀婆羅等五百菩薩師子月等

五百比丘尼思佛等五百優婆塞皆於阿耨

多羅三藐三菩提不退轉者是得大勢當知

是法華經大饒益諸菩薩摩訶薩能令至於

阿耨多羅三藐三菩提是故諸菩薩摩訶薩



於如来滅後常應受持讀誦解說書寫是經  
爾時世尊欲重宣此義而説偈言

過去有佛號威音王 神智無量將導一切

〔裏〕 天人龍神 所共供養 是佛滅後 法欲盡時

有一菩薩 名常不輕 時諸四衆 計著於法

不輕菩薩 往到其所 而語之言 我不輕汝

汝等行道 皆當作佛 諸人聞已 輕毀罵詈

不輕菩薩 能忍受之 其罪畢已 臨命終時

得聞此經 六根清淨 神通力故 增益壽命

復為諸人 廣說是經 諸著法衆 皆蒙菩薩

教化成就 令住佛道 不輕命終 值無數佛

となる。これも小さな破片であるで文字数が少なく問題はなさそうである。原形の大きさは、縦は裏面の最初の行の「是佛滅後」の四字が四・五だであるから、これに間隔三箇所各〇・五だ、上下各縁推定各一だを加えると約二一・五だ、幅は二だで八行、左右各一だを加えると約一八だ、厚さは一・九だである。『浪花拓本集』の四五頁の上段がこれにたたるが、左が表面、右が裏面で、左右逆位置になっている。

⑧ この破片は表裏共一行の上半部四文字しか残存しない。しかし、復原は可能である。まず、表面は

「世界作如……………」

とあり、裏面には



⑧ 卷第六 如来神力品  
(右=表、左=裏)

とある。これは『妙法蓮華經』卷第六、「如来神力品」第二十一である。經文を復原すると次の如くなる。

〔表〕 敬圍繞釋迦牟尼佛既見是已皆大歡喜得  
未皆有即時諸天於虛空中高聲唱言過此  
無量無邊百千萬億阿僧祇世界有國名娑  
婆是中有佛名釋迦牟尼今為諸菩薩摩訶  
薩說大乘經名妙法蓮華教菩薩法佛所護  
念汝等當深心隨喜亦當禮拜供養釋迦牟  
尼佛彼諸衆生聞虛空中聲已合掌向娑婆  
世界作如是言南無釋迦牟尼佛南無釋迦

〔裏〕 牟尼佛以種種華香瓔珞幡蓋及諸嚴身之  
具珍寶妙物皆共遙散娑婆世界所散諸物  
從十方來譬如雲衆變成寶帳遍覆此間諸  
佛之上于時十方世界通達無礙如一佛土



之大施主汝等亦應隨學如來之法勿生慳

〔裏〕 悟於未來世若有善男子善女人信如來智

慧者當爲演說此法華經使得聞知爲令其

人得佛慧故若有衆生不信受者當於如來

餘深法中示教利喜汝等若能如是則爲已

報諸佛之思時諸菩薩摩訶薩聞佛作是說

已皆大歡喜遍滿其身益加恭敬曲躬低頭

合掌向佛俱發聲言如世尊勅當具奉行唯

然世尊願不有虛諸菩薩摩訶薩衆如是三

さて、書写上の問題はないが、注目すべきことが一点ある。それは、

これに続く瓦経が、かつて『関西大学博物館紀要』創刊号で発表した板野町伏天理教所蔵の瓦経片(4)<sup>⑩</sup>である。これも小さな破片であり残存文字が少ないから直接に接合はしないが、復原を行うことによつてこの二枚は連続することが判明した。このことは復原研究によつて知ることのできる成果である。なお、この部分を書写した瓦経は奈良国立博物館所蔵<sup>⑩</sup>にも見ることができ

原形の大きさは表面二行目の「量百千萬億阿」の六字が七・五センチであるから、上下端縁各一センチを加算すると約二三・三センチとなる。横は一行幅が二センチであるから八行と、左右端縁各〇・五センチを加えると約十七センチとなる。厚さは一・八センチである。なお『浪花拓本集』の十九頁の瓦経片がこれに該当する。

⑩ これも小破片であるが、文字は読むことができるので復原可能である。表面に

一切衆……………

尊世……………

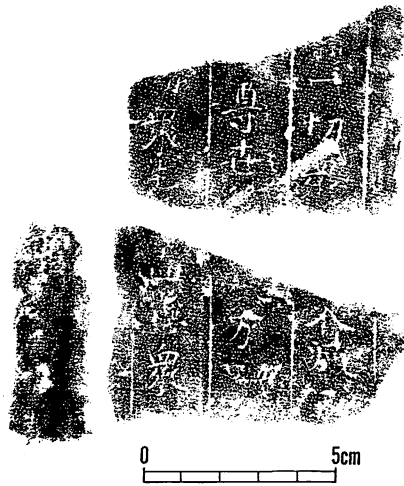
衆……………

とあり、裏面には

火滅……………

万四……………

蓋懸衆……………



⑩ 卷第六 薬王菩薩本來品 (上=表、下=裏)

とある。『妙法蓮華經』卷第六、薬王菩薩本來品』第二十三の経文である。復原すれば次の如くなる。

〔表〕 爾時一切衆生意見菩薩說是偈已而白佛

言世尊世尊猶故在世爾時日月淨明德佛

告一切衆生慧見菩薩善男子我涅槃時到  
滅盡時至汝可安施床座我於今夜當般涅  
槃亦勅一切衆生慧見菩薩善男子我以佛  
法囑累於汝及諸菩薩大弟子并阿耨多羅  
三藐三菩提法亦以三千六千七寶世界諸  
寶樹寶台及給侍諸天悉付於汝我滅度後

〔裏〕

所有舍利亦付囑汝當令流布廣設供養  
起若干千塔如是日月淨明德佛勅一切衆  
生慧見菩薩已於夜後分入於涅槃爾時一  
切衆生慧見菩薩見佛滅度悲感懊惱戀慕  
於佛即以海此岸梅檀爲積供養佛身而以  
燒之火滅已後收取舍利作八萬四千寶瓶  
以起八萬四千塔高三世界表刹莊嚴垂諸  
幡盡懸衆寶鈴爾時一切衆生慧見菩薩復

文字も僅かであるから書写上の問題はない。

原形の復原は表面の「一切衆」の三字が三・六枚であるから、十七字分、それに上下端縁推定各一・五枚を加えると約二三・四枚、幅は一行が平均二枚、それに左右両端縁各〇・八枚であるから約十七・六枚、厚さは二枚と復原できる。なお、『浪花拓本集』五〇頁の上二つがこの破片であるが、下が表面、上が裏面であるからこれも上下逆になっている。

以上、巻第五・六の十点の破片について復原を行い、その過程で明ら

かになった問題について考察を試みた。いずれも小破片であるが、幸い表裏を同定し、それぞれ原形の一枚の経文を復原することができた。なかには經典首題を省略したり、空白部分をつくったり、一行の文字数が十七字詰という原則から逸脱したりするものもあるが、概して所定通りの書写を行っていると思う。なお、これらの瓦経の大部分は昭和三十五年四月五日付で徳島県の文化財に指定され、現在阿南市長生町の西室苑の所有となっている。

わが国における著名な瓦経として知られる犬伏出土の全体の復原を志向するものである。

註

- ① 網干善教「徳島県犬伏旧釈迦堂出土瓦経片の復原研究―無量義経について―」千葉乗隆博士還暦記念『日本の社会と宗教』昭和五十六年十二月
- ② 網干善教「徳島県犬伏旧釈迦堂出土瓦経片の復原研究(二)―佛説観善賢行法経について―」『関西大学考古学等資料室紀要』第一号 昭和五十九年三月
- ③ 網干善教「阿波国出土瓦経片の積聚―散在する資料の集録と復原―」『関西大学博物館紀要』創刊号 平成七年三月
- ④ 網干善教「徳島県犬伏旧釈迦堂跡出土瓦経拓」昭和四十八年七月
- ⑤ 網干善教「阿波国出土瓦経片の積聚―散在する資料の集録と復原―」『関西大学博物館紀要』創刊号(前出)
- ⑥ 網干善教「江口治郎氏より寄贈された瓦経片」『阡陵』第三号 昭和五六

年五月

- ⑤ 網干善教「黒川古文化研究所蔵瓦経片の復原し伯耆大日寺出土の瓦経について」横田健一先生古稀記念『文化史論叢』昭和六十二年三月
- ⑥ 網干善教「奈良国立博物館蔵を主とする瓦経の復原」『南部佛教』第四十二号 昭和五十四年十二月